

清代の三國通俗文藝と『三國志演義』

中川 諭

一

『三國志演義』は、明代に成立して以來、多くの讀者から好評を得、各種の版本が出版された。そして現在に至るまで、四十種以上の版本が伝わっている。

高い人氣を保ち續けた『三國志演義』以外に、明代には「三國志」の物語を題材にした通俗文藝作品が數多く存在している。清代に至っても、各地の三國評話・『三國志玉璽傳』をはじめとする彈詞・『三國志鼓詞』をはじめとする鼓詞など、引き続きさまざまな三國通俗文藝が編纂された。これらの三國通俗文藝は、當然『三國志演義』の影響を強く受けている。そのうち、『三國志玉璽傳』は乾隆年間の成立であり、『三國志鼓詞』は清末期の成立であって、この二つの作品の成立時期は、およそ百年あまりの隔たりがある。そしてそれらの文章を讀んでみると、印象が大きく異なるように感じられる。その原因は、それらもとづいた『三國志演義』の版本の違いによるのかも知れない。だとすると、『三國志玉璽傳』と『三國志鼓詞』はそれぞれ『三國志演義』のどの版本にもとづいたのであろうか。またこれら二つの通俗文藝作品と『三國志演義』とはいかなる關係にあるのであろうか。

陳翔華氏の「明清以來の三國說唱文學—兼說它與歷史小說『三國演義』的關係^①」という論文は、明清時代の三國說唱文學と『三國志演義』の關係についての総合的で詳細な研究である。明清時代の三國說唱文學作品の狀況を概観し、その後說唱文學と『三國志演義』の内容を比較し、說唱文學作品の中に付け加えられた故事や『三國志演義』に比べて發展的に描かれている人物形象などについて論じる。そして『三國志玉璽傳』については次のように述べている。

今見彈詞《三國志玉璽傳》二十卷，乾隆年間抄本，鄭州市圖書館藏（另有「蘇」李福清藏清抄殘本五卷，內容據介紹與二十卷本同）。此書雖是據羅貫中的小說改編的，但無異於重新創作。所謂「三國志玉璽傳」，即因其取《三國志演義》中的劉備故事，首尾貫穿劉備與邢校花戀愛及兩世姻緣，而「玉璽」乃為劉備贈邢校花之物，「玉璽天叫重配合，成都王府共成親」，故以為書名。

續いて『三國志演義』の中には見られない邢校の物語を紹介する。しかし『三國志玉璽傳』が『三國志演義』のどの版本にもとづくのかについては觸れられていない。また『三國志鼓詞』については、現存する殘抄本『通俗三國志全傳』を取り上げて毛宗崗本との關係について指摘しているが、その論證は必ずしも具體的なものではない。

また後藤裕也氏は「車王府本鼓詞『三國志』の成立過程について—『三國志演義』との關係を中心に—^②」と題する論文において、鼓詞『三國志』と毛宗崗本『三國志演義』の文章を比較し、鼓詞『三國志』の中における毛宗崗本の影響を指摘する。同時にそれは鼓詞『三國志』の卷九十三以降に限られることを論證している。そして、

この車王府藏鼓詞『三國志』は、卷九十二までは毛宗崗本を参照しながらも、六卷本をもとに語り物へと改編し、

それ以降は毛宗崗本を底本として、一つの小説を語り物の作品へと改編したのである。

と結論づける。後藤氏の研究は車王府本鼓詞『三國誌』についてのものであり、鼓詞『三國誌』については詳しく考察されているが、『三國志玉璽傳』などそれ以外の三國通俗文藝は取り上げられていない。

そこで本稿では清代に成立した三國通俗文藝の中から『三國志玉璽傳』と『三國志鼓詞』を取り上げ、『三國志演義』の各種版本の文章と比較し、この二種の三國通俗文藝と『三國志演義』との関係を明らかにしようとするものである。

二

まず『三國志玉璽傳』と『三國志演義』の関係について考えてみよう。

『三國志玉璽傳』は清の乾隆年間初期に成立したとされる³⁾。一方で、毛宗崗本『三國志演義』の成立は康熙五年以前である⁴⁾。成立時期だけから見ると、『三國志玉璽傳』は毛宗崗本の影響を受けて成立した可能性もある。では、実際はどのようなであろうか。

『三國志玉璽傳』の中に、次のような文章がある。

雲長取得顔良首，愈加敬重十分深。表奏朝廷加俸祿，要封名爵列侯行。即把黃金來鑄印，壽亭侯爵與其身。便令張遼賚印至，送到關公營内存。雲長一見多推託，功微不敢受侯名。原令張遼回壁去，再三不肯受封恩。張遼只得回還去，印獻曹公說事因。丞相便問他看否？遼言看過又回臨。丞相見說知道了，遂交銷印再封名。壽亭侯印四個字，再

加一字要分明。漢壽亭侯之印名。又令張遼送到營，關公方始來拜受，丞相能知我意心。

〔三國志玉璽傳〕卷七

關羽の「漢壽亭侯」の故事である。下邳での戦いに敗れた關羽は三つの条件を提示してやむを得ず曹操に降った。曹操が袁紹を攻めている時、袁紹配下の大将顏良が出陣し、曹操軍の大将は顏良に斬られてしまった。曹操が關羽に出陣させると、關羽は一瞬のうちに顏良を斬り、曹操軍は大勝した。曹操は朝廷に奏上した後、關羽に「壽亭侯」の印を贈った。しかし關羽は受け取らない。今度は漢王朝の「漢」の字を加えて「漢壽亭侯」の印を贈ると、關羽は喜んで受け取った、という話である。そもそも「漢壽亭侯」の「漢壽」は地名、「亭侯」は爵名であるから、「漢壽亭侯」は「漢壽の亭侯」の意であり、したがってこの故事は誤りである。しかしこの故事は『三國志演義』の諸版本の中に見られ、毛宗崗本にいたって初めて削られた⁽⁶⁾。すなわち『三國志玉璽傳』に存在するこの「漢壽亭侯」の故事は、毛宗崗本には見られないのである。

毛宗崗本第二十五回到次のような文章がある⁽⁷⁾。場面は、下邳の戦いで敗れた關羽が曹操に降参した直後のところである。

次日、班師還許昌。關公收拾車仗，請二嫂上車，親自護車而行。於路安歇館驛，操欲亂其君臣之禮，使關公與二嫂共處一室。關公乃秉燭立於戶外，自夜達旦，毫無倦色。操見公如此，愈加敬服。既到許昌，操撥一府與關公居住。關公分一宅爲兩院，內門撥老軍十人把守，關公自居外宅。

〔毛宗崗本 第二十五回「屯土山關公約三事 救白馬曹操解重圍」〕

いわゆる「關羽秉燭達旦」の故事である。この文章中「於路安歇館驛」から「愈加敬服」までの五十數字は、毛宗崗本以外の『三國志演義』諸本には見られない。たとえば余象斗本⁽⁸⁾は同じ場面を次のように記す。

次日、操班師回許昌、令軍馬先起。雲長收拾車仗、請二嫂嫂上車、親自引軍護送而行。操時使人供送物件飲食。已到許昌、軍馬各還營寨。操撥一府與雲長居住。雲長分一宅爲兩院、內門撥老軍十人以守之、關公自居外宅。

(余象斗本 卷五「張遼議說關雲長」)

『三國志玉璽傳』には、やはり「關羽秉燭達旦」の故事に相當する文章は見られない。

このように、毛宗崗本に見られない「漢壽亭侯」の故事が『三國志玉璽傳』に見られる一方、毛宗崗本に見られる「關羽秉燭達旦」の故事が『三國志玉璽傳』には見られない。したがって『三國志玉璽傳』が編纂されるに当たり毛宗崗本の影響は受けていないと考えられよう。

續いて『三國志玉璽傳』と『三國志演義』諸本の文章を比較してみよう。

『三國志演義』諸本は、大きく二十四卷系諸本・二十卷繁本系諸本・二十卷簡本系諸本に分けられ、二十卷簡本系はさらに「志傳」グループと「英雄志傳」グループとに分けられる⁽⁹⁾。では『三國志玉璽傳』はどの系統の版本に基づいて編纂されたのだろうか。この問題を明らかにするために、まず『三國志演義』各系統の文章を検討する。以下、二十四卷系から嘉靖本⁽¹⁰⁾と毛宗崗本、二十卷繁本系から余象斗本、二十卷簡本系の「志傳」グループから黃正甫本⁽¹¹⁾、「英雄志傳」グループから楊美生本⁽¹²⁾を用いる。

まず例を一つ見てみよう。場面は、董卓が殺された後、李傕・郭汜が權力を掌握した。楊彪は離間の計を用いて李傕・郭汜が仲違いをするようし向けた。楊彪の離間の計は成功し、李傕と郭汜は反目し合い、李傕は皇帝をさらって鄆塢へ逃げていった。李傕軍の兵士は大半が西涼出身で、李傕が褒美を與えなかったために、兵士たちは皆西涼へ歸って行った。賈詡はこの機に乗じ、李傕に大きな褒美を與えてなだめるよう皇帝に進言した。皇帝はそれを聞き入れ、李傕を大司馬に封じた、というところである。(版本間の違いが分かりやすいよう、適宜空白を入れた。以下同じ。)

嘉靖本 卷三「楊奉董承雙救駕」

毛宗崗本 第十三回「李傕郭汜大交兵 楊奉董承雙救駕」

余象斗本 卷三「楊奉董承雙救駕」

黃正甫本 卷三「楊奉董承雙救駕」

楊美生本 卷三「楊奉董承雙救駕」

嘉靖本	毛宗崗本	余象斗本	黃正甫本	楊美生本
惟心中大喜言曰「此乃 是女巫 神鬼 之 力也。」遂重賞 女 巫， 不賞 軍 士。	惟 喜言曰「此 女巫降 神祈禱之 力也。」遂重賞 女 巫， 却不賞 軍 將。	惟 大喜言曰「此 皆鬼神 之 力也。」 厚賜 諸巫， 不理軍 事。	惟 曰「此 皆鬼神 之 力也。」 厚賜 師巫， 不理軍 事。	惟 曰「此 皆鬼神 之 力也。」 厚賜 巫師， 不理軍 事。李傕平生信妖 術，常于營中，使女巫

騎軍都尉楊 奉大怒，與 宋果 曰 「吾等入 生出 死， 身冒矢石， 反 不及 女 巫耶。」 宋 果 曰「何不殺此賊， 以救天子。」	騎 都尉楊 奉大怒， 謂宋果 曰 「吾等 出生 入死， 身冒矢石， 功反 不及 女 巫耶。」 宋 果 曰「何不殺此賊， 以救天子。」	車騎 都尉楊 奉大怒，與 宋 果曰 「吾等 出 死 入生，身冒矢石， 反 不及 師巫 也。」 宋 果曰「何不殺此賊， 以救天子。」	騎 都尉楊 奉大怒，與 宋 果曰 「吾等 出 死 入生，身冒矢石， 反 不及 師巫 也。」 宋 果曰「何不殺此賊， 以救天子。」	擊鼓降神。 騎 都尉楊 奉大怒， 謂宋 果曰 「吾等 出 死 入生，身冒矢石， 反 不 如 師巫 也。」 宋 果曰「何不殺此賊， 以救天子。」
---	--	---	--	---

この例を見ると、楊奉が怒って宋果に言ったセリフの前に、楊美生本にのみ「李催⁽¹³⁾平生信妖術，常于營中，使女巫擊鼓降神。」という一文があり、李催が巫女を重く用いている様子が説明されている。このような一文はその他の系統の版本には見られない。一方で、『三國志玉璽傳』の該當箇所を見ると、次のようにある。

却說李催營內事，善信師巫降鬼神。吉凶之事憑巫語，願賜師巫百兩金。楊奉將軍心內怒，宋果副將定機文。他人只把師巫重，我等功勞不記心。殺了李催人一個，救了朝中聖主人。

（『三國志玉璽傳』卷四）

『三國志玉璽傳』にもやはり「楊奉將軍心內怒」の一句の前に「却說李催營內事，善信師巫降鬼神。吉凶之事憑巫語，願賜師巫百兩金。」とあり、李催が巫女を重用している様子が詳しく説明されている。この点からすると、『三國志玉璽傳』の文章は楊美生本と密接な関係にあると言えよう。

もう一つ別の例を見てみよう。場面は、諸葛孔明は孫權と同盟を結ぶために、魯肅とともに單身柴桑へやってきた。到着後、魯肅は孔明に曹操軍の兵力の大きさを孫權に言ってはならないと告げた。魯肅が孔明を大廣間に案内し、孔明は孫權と対面した。孫權は孔明に曹操軍の状況を尋ねた。

嘉靖本 卷九「諸葛亮智激孫權」

毛宗崗本 第四十三回「諸葛亮舌戰群儒 魯子敬力排衆議」

余象斗本 卷八「諸葛亮激孫權」

黃正甫本 卷八「諸葛亮激孫權」

楊美生本 卷八「諸葛亮智激孫權」

嘉靖本	毛宗崗本	余象斗本	黃正甫本	楊美生本
孔明曰「曹操破了呂布，滅了袁紹，平了袁術，收了北番，定了遼東，新又降了劉琮，馬步水軍 一百餘萬。」	孔明曰「	孔明曰「曹操破 呂布，滅 袁紹，平 袁術，收 北番，定 遼東，新 伏 劉琮，步 軍水軍 一百餘萬。」魯肅聽了，暗暗叫苦，却將分付的不依。	孔明曰「操破 呂布，滅 袁紹，平 袁術，收 北番，定 遼東，新 伏 劉琮，步 軍水軍 共 一百餘萬。」肅聽，暗暗叫苦。	孔明曰「操破 呂布，滅 袁術，收 北番，定 遼東，新 伏 劉琮，步 軍水軍 一百餘萬。」魯肅聽之，暗暗叫苦。
權曰「莫非詐乎。」孔	權曰「莫非詐乎。」孔	權曰「莫非詐乎。」孔	權曰「莫非詐乎。」孔	權曰「莫非詐乎。」孔

<p>明曰「明公差矣。曹操就兗州，已有青州軍 四五 十萬。平了袁紹，又得 兵四五 十萬。中原新召 之兵，何止 三 十 萬。今 得荊州之兵，亦有二三十萬。以此論之，不下一百五十萬。亮以一百萬言之，恐驚 江東之士也。」</p>	<p>明「非詐也。曹操就兗州，已有青州軍 二十萬。平了袁紹，又得 五 六十萬。中原新 招 之兵 三四十 萬。今又得荊州之兵，二三十萬。以此計之，不下一百五十萬。亮以 百萬言之，恐驚 江東之士也。」魯肅在旁，聞言失色，以目視孔明。孔明只做不到。見。權 曰「曹操 部下戰將，還有多 少。」孔明曰「足 智多謀之士，揚威耀武 之人，何止 有二三千。」權曰「比</p>	<p>明曰「明公 差矣。曹操就兗州，已有 兗 州 兵四 十萬，平 了袁紹，又得 四五 十萬， 原新招 之兵，何止二三 十 萬。今 得荊州之兵，亦有二三十萬。以此 論之，不止一百五十餘 萬。亮以一百萬言之， 恐驚動江東之士也。」</p>	<p>明曰「明公 差矣。 操就兗州， 青 州 兵四 十萬，平 袁紹，又有 四五 十萬， 原新 招 兵，何止 二三 十 萬。今 得荊州 兵， 亦有 三十萬。以此 論之，不止一百五十 萬。亮以一百萬言之， 恐驚動江東之士。」</p>	<p>明曰「明公 差矣。 操就兗州， 已有青 州 兵四 十萬， 平 袁紹，又得 四五 十萬， 原新 調 兵，何止 二三十 萬。今 得荊州 兵， 亦有 三十萬。以此 論之，不下一百五十 萬。亮以 百萬言之， 恐驚江東之士也。」</p>
<p>權 曰「 手下戰將， 還有多 少。」孔明曰「足 智多謀之士，揚威耀武 之人，何止 有二三千。」</p>	<p>權 曰「曹操 部下戰將， 還有多 少。」孔明曰「足 智多謀之士， 揚威耀武 之人，何止 有二三千。」</p>	<p>權又問曰「 手下 將士，還有 幾何。」孔明曰「足 智多謀之士，揚威耀武 之人，何止 一二千人。」</p>	<p>揚威耀武 之人，何止 一二千。</p>	<p>權又問曰「 手下將士，遂有 幾何。」孔明曰「足 智多謀之士，揚威耀武 之人，何止 一二千。」</p>

<p>公如何。」孔明曰「如亮之輩，車載斗量，不可勝數。」</p> <p>孫權曰「今曹操平了荆楚，復有遠圖乎。」孔明曰「即今沿江下寨，準備戰船，旌旗蔽空，連絡數百里，不欲圖江南，待取何地。」權曰「若有吞併之意，戰與不戰，請足下一決。」孔明曰「但恐明公不肯聽從。」</p> <p>權曰「願聞金玉之言。」</p>	<p>如</p> <p>亮之輩，車載斗量，不可勝數。」肅又暗暗叫苦。</p> <p>權曰「今曹操已平荆襄，復有遠圖乎。」孔明曰「目今在江漢札寨，準備戰船，往旌蔽空數百里，不待圖江南，特投何地耶。」權曰「操有吞併之意，戰與不戰，請足下一決。」孔明曰「但恐明公不肯聽從耳。」</p> <p>權曰「願聞金玉之論。」</p>	<p>如</p> <p>亮之輩，車載斗量，不可計數。」</p> <p>權曰「今操已平荆楚，復有遠圖乎。」孔明曰「目今沿江下寨，準備戰船，旌旗滿空，連野數百里。不欲圖江南，待占何地。」權曰「操有吞併之心，戰與不戰，請足下一決。」孔明曰「但明公不肯聽從耳。」</p> <p>權曰「願聞金玉之論。」</p>	<p>如</p> <p>亮之輩，車載斗量，不可計數。」肅又暗暗叫苦。</p> <p>權曰「今曹操已平荆楚，復有遠圖乎。」孔明曰「目今沿江下寨，準備戰船，旌旗蔽空數百里。不欲圖江南，待占何地耶。」權曰「操有併吞之意，戰與不戰，請足下一決。」孔明曰「但恐明公不肯聽從耳。」</p> <p>權曰「願聞金玉之論。」</p>
---	--	--	---

『三國志玉璽傳』の同一個所は、次のように描いている。

孔明答曰「曹操破呂布，滅袁紹，平袁術，收北番，定遼東，新服劉琮，水軍步軍合百〔萬〕人，青州向有軍，四五
十萬，亮以百萬言之者，恐驚江東之土耳。」孫權又問曰「將士知他幾何？」孔明曰「智足多謀，揚威耀武，何止三
千。如亮之輩，車載斗量，不計勝數。」魯肅暗暗叫苦。孫權又曰「今曹操已平荊州，復有遠圖乎？」孔明曰「自今
沿江下寨，整治戰船，旌旗擁蔽數百里，必欲圖江東待占此地。」孫權曰「操併吞之意，戰與不戰，請先生一決。」孔
明曰「但恐明公不肯聽耳。」孫權曰「願聞得，但願金石之命。」

〔三國志玉璽傳〕卷十二

『三國志演義』五種の版本と『三國志玉璽傳』の文章を比較すると、『三國志玉璽傳』の「孔明曰『智足多謀，揚威耀
武，何止三千。如亮之輩，車載斗量，不計勝數。』魯肅暗暗叫苦。孫權又曰『今曹操已平荊州，復有遠圖乎？』」という
一段とほぼ同じ文章が、余象斗本・楊美生本にも見える。特に『三國志玉璽傳』の文章中に「魯肅暗暗叫苦」という六
文字が見え、そして余象斗本と楊美生本の文章の同一の個所にも「肅又暗暗叫苦」という文字が見える。この「暗暗叫
苦」の一句は、ほかの三種の版本の該當個所には見えない。この例から見ると、『三國志玉璽傳』の文章は、二十卷繁
本系かあるいは二十卷簡本系の「英雄志傳」グループに近いように思われる。

現存する四十種あまりの『三國志演義』諸本の中で、毛宗崗本を除けば、清代に刊行されたものは、『李卓吾先生批
評三國志』と題するいわゆる「李卓吾評本」、あるいは「英雄志傳」グループに属するいくつかの版本である。特に清
代初期にもっとも流行した『三國志演義』の版本は「英雄志傳」グループに属する版本である。⁽¹⁴⁾清代以降になって出版
された二十卷繁本系に属する版本は現存しない。これは二十卷繁本系の版本は清代になって刊行されなかったか、ある

いは刊行されても数は極めて少なかったためではないか。だとすると、『三國志玉璽傳』が清代になって成立した通俗文藝作品である以上、二十卷繁本系の版本から影響を受けたという可能性はそれほど大きくないだろう。やはり『三國志玉璽傳』は「英雄志傳」グループの中の一本の影響を受けて成立したものであると考えられる。

三

續いて『三國志鼓詞』と『三國志演義』の関係について考えてみよう。

先に述べたように、毛宗崗本には「漢壽亭侯」の故事はなく、ただ曹操が關羽を漢壽亭侯に封じたという記述が見られるだけである。では『三國志鼓詞』は該當箇所をどのように描いているのであろうか。

却說曹操見關公斬了顏良，班師回朝，來奏天子，封關公爲漢壽亭侯，使鑄印送與關公。

關夫子刀斬顏良立大功 曹孟德奏表天子把侯封 大家裡謝恩出朝入府相 在後堂設宴慶賀飲劉伶 忽有個藍旂下馬

前來報 就說道大將文醜鈞領兵 曹孟德即刻傳令起人馬 復到他白馬津邊安大營 差遣着徐晃張遼去出戰 與文醜

疆場比武決雌雄 兩下裡大殺大砍只一陣 勇徐晃竟被文醜斬盔纓 張文遠戰馬中了雕翎箭 痛的他敗回大營一溜風

(『三國志鼓詞』卷三第十一回)

このように、「白」の部分でただ曹操が關羽を漢壽亭侯に封じたという記述があるだけで、曹操が關羽に「壽亭侯」の印を贈ったが斷られ、次に「漢壽亭侯」の印を贈ったら、關羽は喜んで受け取ったという記述はない。「唱」の部分

も同様で、曹操が關羽を侯に封じたと記されているだけである。では、毛宗崗本の同一場面を見てみよう。

且說曹操見雲長斬了顏良，倍加欽敬，表奏朝廷，封雲長爲漢壽亭侯，鑄印送關公。

(毛宗崗本第二十六回「袁本初損兵折將 關雲長掛印封金」)

『三國志鼓詞』と比較して、毛宗崗本の中にある「倍加欽敬」の四文字が『三國志鼓詞』の中には見えないけれども、その他についてはわずかな文字の異同があるだけで、語彙・語順に大差はない。したがって『三國志鼓詞』は毛宗崗本の影響を強く受けていると考えられよう。

では「秉燭達旦」の故事はどうであろうか。

自昏至晚，一夜毫無倦色。至今相傳，秉燭達旦之事，卽此夜也。

關夫子秉燭達旦在店房 傳留下不朽芳名萬古揚 曹阿瞞愈加敬服不敢慢 不幾日夜住曉行到許昌 打掃出宮宅一所

安家眷 高聳聳大廳三間竝兩廂 又打上一宅兩院分前後 安點的內外清楚不尋常 挑撥了十個老軍守門戶 等閑裡

不許一人入後堂

(『三國志鼓詞』卷三 第十回)

曹操は關羽と二人の兄嫁とを同じ部屋に泊ませようとしたが、關羽は燈火を手に取り戸外で立ったまま、一晚中疲れた様子も見せなかった。このように「秉燭達旦」の故事は『三國志鼓詞』の中に見られる。そしてその記述を先に引

用した毛宗崗本の文章と比較してみると、大きな違いはなく、語彙も語順もきわめて似たものになっている。この点からも、『三國志鼓詞』は毛宗崗本の影響を受けていると言えよう。

續いて、『三國志鼓詞』と『三國志演義』諸本の文章を見てみよう。

最初の例は、王允は連環の計を實行し、貂蟬と呂布の結婚を許し、その一方で董卓にも貂蟬を與えた。董卓は貂蟬を太師府へ連れて歸った。呂布は太師府の中でこっそりと貂蟬と會った。それを知った董卓は怒ったが、李儒の進言により、董卓は貂蟬を呂布に與えることにした。貂蟬はその話を聞き、拒絶した、という場面である。

嘉靖本 卷二「王允授計誅董卓」

毛宗崗本 第九回「除暴凶呂布助司徒 犯長安李傕聽賈詡」

余象斗本 卷二「王允定計誅董卓」

黃正甫本 卷二「王允定計誅董卓」

楊美生本 卷二「王允定計誅董卓」

嘉靖本	毛宗崗本	余象斗本	黃正甫本	楊美生本
次日李儒入見曰「今日 良辰，可將貂蟬 送與呂布。」	次日李儒入見曰「今日 良辰，可將貂蟬 送與呂布。」卓曰「布 與我有父子之分，不便 賜與。我只不究其罪，	次日李儒入見曰「今日 良時，可將貂蟬 送與呂布去。」	次日李儒入見曰「今 乃良辰，可將貂蟬 送與呂布。」	次日李儒入見曰「今 旦良辰，可將貂蟬 送與呂布。」

<p>色曰「汝之妻肯與呂布 麼。」 儒曰「主公不 可被 婦人所惑。」卓 曰「甚 婦人能惑我心。 貂蟬之事，再 勿多言。 言則必斬。」</p>	<p>汝傳我意，以好言慰之 可也。」 儒曰「太師不 可爲婦人所惑。」卓變</p> <p>色曰「汝之妻肯與呂布 否。」</p> <p>貂蟬之事，再勿多言。 言則必斬。」</p>
<p>色曰「汝之妻肯與呂布 麼。」 儒曰「不 可被一婦人所惑。」卓 曰「其婦女能惑我心。 貂蟬之事， 切勿多言。 言則必斬。」</p>	<p>卓變</p> <p>色曰「汝之妻肯送呂布 否。」 儒曰「不 可被 婦人所惑。」卓 曰「 貂蟬之事，再 勿多言。 言則必斬。」</p>
<p>色曰「汝之妻肯與呂布 麼。」 儒曰「主公不 可被一婦人所惑。」卓 曰「甚 婦女能惑我心。 貂蟬之事，再 勿多言。 言則必斬。」</p>	<p>卓變</p>

五種の版本の文章を見ると、毛宗崗本のみ「布與我有父子之分，不便賜與。我只不究其罪，汝傳我意，以好言慰之可也。」という董卓の臺詞があり、董卓がなぜ呂布に貂蟬を與えようとしなのかという理由を詳しく説明している。そして『三國志鼓詞』卷二第二十回の同一場面は次のように記している。

李儒說「晚生來非爲他事，只爲貂蟬一節。況今日乃黃道良辰，不免就把貂蟬送與呂布。有何不可。」卓搖頭曰「不可不可。呂布與我有父子名分。此女已事老夫，如何使得再賜呂布。我只不究他罪，寬恕不問。汝傳我意，以好言慰之可也。」李儒說「太師欲圖大業，何吝一女子乎。太師高明，萬不可被婦人所惑。」董卓變色曰「汝之愛妾，何不賜與奉先。貂蟬之事，休再多言。再言者必斬。」

『三國志鼓詞』の文章にも、毛宗崗本と同様に、董卓がなぜ貂蟬を呂布に與えないのかという説明の臺詞があり、また董卓が李儒に呂布を取りなすよう命じる描寫もある。この點で、『三國志鼓詞』の内容は毛宗崗本とのみ一致し、他の四本とは異なっている。したがって『三國志鼓詞』は毛宗崗本と密接な關係にあるといえよう。

もう一つ例を舉げてみよう。場面は、徐庶は劉備に諸葛孔明を推薦し、自らは曹操の陣營へ行った。劉備は臥龍が諸葛孔明であることを知り、隆中臥龍岡の孔明の草庵を訪れた。しかし孔明は不在で、劉備は仕方なく新野に歸った。數日が過ぎ、劉備は孔明が歸宅したという知らせを受け、大雪が降る中關羽・張飛とともに隆中へ向かった。孔明の草庵に着くと、童子が出てきた。劉備は「諸葛先生」は在宅かどうかを尋ねた。

嘉靖本 卷八「玄德風雪訪孔明」

毛宗崗本 第三十七回「司馬徽再薦名士 劉玄德三顧草廬」

余象斗本 卷七「劉玄德風雪訪孔明」

黃正甫本 卷七「玄德風雪謁孔明」

楊美生本 卷七「劉玄德風雪訪孔明」

嘉靖本	毛宗崗本	余象斗本	黃正甫本	楊美生本
童子曰「見 讀 書。」玄德 在堂上	童子曰「 讀 書。」玄德大喜, 現在堂上	童子 言「 觀書。」玄德 在堂上	童子曰「 觀書。」玄德 在堂上	童子 言「 觀書。」玄德 在堂上

<p>遂 跟童子 入，</p> <p>上，一人擁爐抱膝</p> <p>歌曰：</p>	<p>見 草堂之</p> <p>門側窺之，見 草堂之</p> <p>上，一少年擁爐抱膝</p> <p>歌曰：</p>	<p>遂跟 童子而入。至中門，只見門上大書一聯云「淡泊以明志，寧靜而致遠。」玄德正看間，忽聞吟詠之聲，乃立于</p>	<p>隨童子 入，</p> <p>見 草堂</p> <p>上，一人擁爐抱膝而</p> <p>歌曰：</p>	<p>隨童子 入</p> <p>見一人 抱膝而</p> <p>到草堂，</p> <p>歌曰：</p>	<p>隨童子 入，</p> <p>見一人擁爐抱膝而</p> <p>到堂上，</p> <p>歌：</p>
--	--	--	---	--	---

五種類の版本の文章を比較すると、毛宗崗本以外の四本はいずれも、童子が劉備に答えた後、劉備は童子の後について草庵の中に入り、すぐに草堂に一人がいるのを見る、となっている。しかし毛宗崗本は、童子が答えた後、劉備が童子の後について草堂の中に入ると、まず門に對聯があるのを見、そして吟詠の聲が聞こえてきて、それから劉備が草堂に一人（すなわち諸葛均）がいるのを見る、となっている。このように、この場面について毛宗崗本の文章は他の版本よりも精緻な描寫になっている。

では、『三國志鼓詞』の該當個所の文章を見てみよう。

童子曰「現在草堂看書。」玄德聞言大喜，跟隨童子而入。至於中門，見門上一付對聯云「淡泊以明志，寧靜而致遠。」玄德正看之間，又忽聽吟詠之聲。乃立於門外，偷睛窺之，見草堂上有一少年，擁爐抱膝而歌曰：

『三國志鼓詞』のこの場面の文章も、やはり毛宗崗本と同様に、劉備が草庵の門に一對の聯があるのを見、吟詠の聲を聞いてから草堂に一人がいるのが見えるという描寫になっている。この例からも、『三國志鼓詞』の文章は毛宗崗本と密接な関係にあるといえよう。

以上挙げた例のように、『三國志鼓詞』の文章が毛宗崗本ときわめて密接な関係にあるのではないかと思われる例は數多く指摘でき、枚舉に違がない。よって『三國志鼓詞』は毛宗崗本の影響を強く受けて成立したと考えられるのである。⁽¹⁶⁾

四

以上、清代初期から中期にかけて成立した『三國志玉璽傳』には毛宗崗本『三國志演義』の影響がないこと、そして清代後期に成立した『三國志鼓詞』になって毛宗崗本の影響が見られることを示し得たと思う。これは清代における『三國志演義』の版本の流行状況を反映していると見るべきであろう。

従来一般的に、清代になって毛宗崗本『三國志演義』が成立して以後、毛宗崗本は多くの讀者に歓迎されて廣く流行し、明代以來の諸版本はすべて淘汰されたと考えられていた。しかし實際は、上田望氏が指摘するように、毛宗崗本は清代後期になって廣く流通するようになるのである。⁽¹⁷⁾ 清代の前期から中期にかけては、明代以來の版本が引き続き流通していたのであり、中でも「英雄志傳」グループに屬する版本が廣く讀まれていた。⁽¹⁸⁾ 清代において、三國通俗文藝作品を編集するに当たり、當時の『三國志演義』版本の流行状況が反映され、當時もっとも流行していた版本の影響を受け

た。これは軽視できない事実であろう。清代における『三國志演義』や三國通俗文藝について考える場合、清代における『三國志演義』版本の流行状況に注意しなければなるまい。同時に、毛宗崗本以外の明代以来の諸本も、決して無視することはできないのではないだろうか。

注

- (1) 『三國演義論文集』（中州古籍出版社、一九八五年）。
- (2) 『關西大學中國文學會紀要』第27號、二〇〇六年。
- (3) 童萬周校點『三國志玉璽傳』（中州古籍出版社、一九八六年）前言。
- (4) 小川環樹『三國演義』の毛聲山批評本と李笠翁本（小川環樹著『中國小説史の研究』、岩波書店、一九六八年、原載は『神田博士還曆記念書誌學論集』、平凡社、一九五七年）。
- (5) 童萬周校點『三國志玉璽傳』（中州古籍出版社、一九八六年）。
- (6) 中川諭『漢の壽亭侯』（『中國讀書人の政治と文學』林田愼之助博士古稀記念論集編集委員會編、創文社、二〇〇二年）。
- (7) 本稿における毛宗崗本の引用は、『四大奇書第一種』六十卷一百二十回（醉畊堂刊、中國國家圖書館藏）による。
- (8) 『音釋補遺按鑑演義全像批評三國志傳』二十卷（現存卷一、十二、十九、二十）。本稿では『三國志演義古版叢刊』所收の影印を使用した。
- (9) 中川諭『三國志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八年）参照。
- (10) 『三國志通俗演義』二十四卷、上海圖書館等藏。本稿では、人民文學出版社一九七五年影印本を使用した。
- (11) 『新刻攷訂按鑑通俗演義全像三國志傳』二十卷。中國國家圖書館藏。本稿では、中華再造善本所收影印本（北京圖書館出版社、二〇〇四年）を使用した。
- (12) 『新刻按鑑演義全像三國英雄志傳』二十卷。大谷大學圖書館藏。本稿では、大谷大學藏本の複寫を使用した。
- (13) 楊美生本では「李催」を誤って「李催」に作ることが多い。
- (14) 中川諭「上海圖書館藏『三國英雄志傳』二種について」（『新大國語』第三十號、二〇〇五年）、中川諭「繼志堂刊『三國英雄志傳』について」（『中國—社會と文化』第二十號、二〇〇六年）参照。

- (15) 本稿で使用した『三國志鼓詞』のテキストは、『新編繪圖三國志鼓詞』十六卷（民國二十年刊、上海中原書局印行、輪田直子氏藏）である。
- (16) この點で、注(2)前掲後藤氏の論文が指摘する、車王府本『三國誌鼓詞』の卷九十三以降で毛宗崗本の影響が顯著に見られる、という結論と大きく異なる。一口に「三國志鼓詞」と言っても、版本により内容が大きく異なるということであろう。
- (17) 上田望「毛繪、毛宗崗批評『四大奇書三國志演義』と清代の出版文化」（『東方學』第一〇一輯、二〇〇一年）。
- (18) 注(14)前掲筆者論文参照。

〔付記〕

本稿において『三國志演義』諸版本を比較するに当たり、首都師範大學中國傳統文化數字化研究中心の周文業先生が開發された『三國志演義』版本比較プログラムを使用した。ここに記し、感謝の意を表します。

本稿は、二〇〇六年度大東文化大學特別研究費による研究成果である。